



学校法人  
鎌倉女子大学

## 誇りを忘れつつある日本人

文部科学省の調査によれば、全国の小・中学校において学校給食費を滞納した保護者は、2005年度に延べ9万8993人、総額22億2963万円にのぼったといます。各学校に滞納の理由を調べさせたところ、「保護者の経済的な問題」をあげた学校が33.1パーセントあったことから、文科省は、早速生活保護世帯には給食費を補助する制度もあることを周知させるということでした。

バブルがはじけて以後不況にあえいできた経済事情や、地域間格差から逼迫する経営事情など、この問題には十分見回しておかなければならない社会的背景もあることから、滞納者がある程度存在するということは、確かに理解出来ないことではありません。因みに、学校教育費に限っただけでも、今日一人の子どもを成人させるまでには1千3、4百万から、場合によると数千万の費用がかかるわけですから、どこの親の苦労も、並大抵のことではありません。

しかし、ここで私が、そして私のみならず、この報告に接した大方がおやおやとあきれながら聞いたことは、「保護者としての責任感や規範意識の欠如」の理由をあげた学校が実に60パーセント近くにものぼったという事実でした。しかも、この約60パーセントの学校が指摘したことは、滞納者の中には生活に相当の余裕を感じさせる、むしろ消費生活を謳歌している様子さえ窺える者が数多くまじっているという事実でした。つまり、自分の生活を楽しんでも、子どもの給食費は払いたくないと、世の中は、随分変わったものです。戦争の惨禍と戦後の荒廃を生きぬきながら、自分は苦労して働いても、出来れば子どもには淋しい思いをさせたくない、それが、私たちが見た親の姿でした。

誠に苦労なことに、校長先生や教頭先生が各家庭を訪ねて支払いを促しても、「義務教育だから、給食費は国が負担するのは当たり前だ」と、親の義務などどこ吹く風といった稚拙な錯覚というか、開き直った一部保護者の返答がテレビで報道されていたのを視た方も多かったのではないかと思います。やむを得ず、それぞれの学校が予備費から滞納分を補填したり、中には仕方なく自腹を切ったりした学校責任者もいたと聞くと、最早何をかいわんやです。

何とも情けない有様に、日本人の意識は、何とここまでできてしまったのかと思っていたところ、今度は厚生労働省が、全国認可保育所で保育料を滞納した保護者数は2006年度で約8万6千人、総額90億円にのぼると発表しました。

無論、この中にも、先の給食費同様、理解すべき理由を抱えた家庭もあるのでしょう。しかし、相当数の保護者の中には十分払う余裕はあっても払おうとしない恥知らず者が随分まじっているということです。加えて、私が驚いたのは、一応支払いをしている親に滞

納に対する感想を求めたところ、「そんなに不払いの人が多いのなら、私たちも払いたくないわ」といったような、何とも悲しくなる昨今の日本の精神風土、日本人の社会心理ではありませんか。

私の知人がかつて嘆息<sup>たんそく</sup>気味にこういったことがありました。「戦後の日本人は、他人のことを攻撃することは本当に上手になりました。でも、自分のことは、いつも括弧の外なのですよね」と。最近の給食費や保育料の滞納をめぐっては、私たち現代人の意識の典型を見せつけられているようにも思われます。本当に昨今の日本人は、すっかり誇りというものを忘れかけてしまったかのようです。理屈にならない理屈を吹聴し、頓珍漢・珍粉漢であるにも拘わらず、身勝手な自分の主張を押し通す人々が何と増えてしまったことでしょう。

かつて、ジョン・ロックは、「あらゆる他の人間の気まぐれが彼を振り回すかもしれないときに、誰が自由でいられるだろうか」と、自由主義という名の衣装を着飾った、止まることを知らない自己中心主義の犯罪的欺瞞<sup>ぎまん</sup>を指摘したことがありますが、こうした身勝手な自由を主張する人々ばかりがはびこっていくとなると、この国の将来は、一体どうなっていくのでしょうか。国の将来への不安を語るなどということは、教育の放棄、そもそも教育に携わる者が口にすべきことではないのかも知れませんが……。

自分自身の子どもの教育費を支出している上に、納税という行為を通じて、見ず知らずの他人の子どもたちの教育費までまかなっているのですから、私は、私立学校に子弟を送る保護者には頭が下がります。アメリカやイギリスで私立学校に子どもを遣<sup>や</sup>る親が他人から尊敬もされ、自分自身に対して秘かな誇りを感じているのは、そういう理由によるものです。いや、それ以前に、子どもを私立に送る親であろうと公立に送る親であろうと、親の精一杯の努力は、子どもたちの心に深く刻印されているもので、私が担当する「建学の精神」の試験答案にも、こう書きつづってくれる学生たちが随分いるものです。「普段は照れくさくて『ありがとう』の言葉を直接口に出来ないのですが、自分を大学に送り出してくれる親の物心伴う支援にはいつも感謝しています」と。

[>前のページへ戻る](#)